

省エネ雑感

森 康 夫*

最近は各地で異常気象が発生しているようであるが、今冬の札幌では、2月に入り積雪量が1m数10cmの大雪に見舞われた。異常気象のせいかどうかは判らないが30数年ぶりということである。わが家での除雪に追われると同時にバス通勤の身にとってはつくづく降ってくる雪が恨めしく思われた。

このドカ雪で交通を確保するのも並大抵ではないだろう、それにしても自然の力は、などと思いつつも待ってもなかなか来ないバス、ようやく乗っても遅いバスにはイライラが募るばかりである。札幌市内におけるここ10年間の車の登録台数は、人口の伸び率1.2倍を上回り、約50万台から1.6倍の80万台にも増加し、通勤時のマイカー使用割合は1/3以上にのぼるそうである。雪が降って交通が混雑し、渋滞がひどくなるのは判るが、マイカーに乗っているのはほとんどが1人か、せいぜい2人である。しかも、最近の乗用車は大型化、高性能化などが進み、専用面積も大きくなっている。

車の燃費は、車両重量が10%増えると約10%低減するし、走行速度との関係では、例えば時速10(20)km/hで走行すると40km/hの場合より2.5(1.6)倍の燃料が必要になるという推定値もある。エネルギーの効率がより高いバスなどの公共交通機関を利用することにならないものかと思っでは見るのだが…。

このような傾向は、オイルショック後に省エネを追及してきた家電製品にも見られる。家電製品の電力消費量についてみると、1973年度と比較して、例えば冷凍冷蔵庫は1/3程度になっているし、テレビ、エアコンも40%以上の省エネが図られるまでに改善されている。個々の製品の省エネは実現できたが、テレビや冷蔵庫に見られるように、大型化、高級化、多機能化が進み、全体としての消費エネルギーは増加傾向にあるという。

また、最近では長時間にわたる連続使用製品があり、例えばリモコン付きテレビ、エアコンが常時待機の状態にあると、待機によって全消費

量の10%近いエネルギーを消費する場合があるという調査結果もある。すなわち、自動車の場合についても同様であるが、純技術的な省エネ対策が大きな役目を果たしているものの、ユーザーの経済的なゆとりや嗜好、使用条件などとの関連から技術的な要因のみでは、その目的を達成できないことを表している。

20年程前のオイルショック時には、マイカーの自粛や石油スタンドの日曜祭日休業があった。街のネオンは消え、テレビ放映時間の短縮もあったりして、少資源国であることと省エネの辛さを肌身で感じた。今後、エネルギーや資源の需給関係は、逼迫化が強まってはきても弱まることはないと考えるべきであろうが、そうした資源枯渇面からの省エネ意識は薄らいでしまっているようである。また、地球環境問題の中心テーマの1つとして自動車の排気ガスに含まれているCO₂がもたらす温暖化がクローズアップされている。国内のCO₂の総排出量の内、自動車交通によるものは約20%であるが、その根本的な対策としては、今のところ排出量の削減、すなわち資源枯渇とは別の観点からの着実な省エネが必要な時代になってきている。

これらの省エネや地球環境などに対する関心度は高い割には、積極的に行動する人はむしろ少なくらいだとされている。見方を変えれば赤信号皆で渡れば怖くない式の意識がどこかにあるといったら誤りであろうか。省エネや環境対策に関しては、自らがその責任感をしっかり持って、エネルギーや資源を使うことの恩恵と引き換えに、ある程度の痛み分けを受け入れて行く必要があるということであろう。自分達の職場においても、例えば照明や用水、あるいはOA機器などについて、用紙も含めてその使い方に無駄はないだろうか…。

石油や電気、その他の資源をケチケチ使って生活するのでは豊かさの実感が薄れるが、少資源国としての立場や今後の地球環境を考えると、賢くエネルギーや資源を使って生活していくのも貴重な資源のひとつであるということをも銘記しておきたいと思う。

*研究調整官